精神神経学雑誌　第111巻第6号（2009）　727-729頁

第14回世界精神医学会議プラハ大会：印象記

藤本　美智子[1,7]，中前　貴[2,7]，
衞藤　暢明[3,7]，馬場　俊明[4,5,7]，
加藤　隆弘[6,7]

＜索引用語：世界精神医学会議，世界精神医学会，プラハ，歴史，日本若手精神科医の会＞

はじめに

第14回世界精神医学会議（XIV World Congress of Psychiatry：以下WCP）は，「Science and Humanism: For a Person-Centered Psychiatry」をメインテーマに掲げ，2008年9月20日～25日の6日間，チェコ共和国のプラハで開催された．WCPは，世界精神医学会（World Psychiatric Association: 以下WPA）が3年毎に主催している世界最大規模の総合精神医学会議で，世界中から精神科医を中心とした精神保健の専門家が集まる国際学術会議である．2002年横浜大会，2005年カイロ大会に引き続く今回のプラハ大会には，世界150カ国から6000人に及ぶ参加者を迎え，演題数も3000題を超えた．日本からも多数参加者があり，日本若手精神科医の会（JYPO）の会員も10を超えるポスターセッション，シンポジウムでの発表を行った．筆者らは，本会議に参加した印象を，若手精神科医という立場から，また本会議のメインテーマの一つである「精神医学の歴史」という視点と併せて述べてみたい．

本会議の公認イベントとして，ユネスコの世界文化遺産に指定されているクロメェジージュ市と，プリーボ市にあるFreud, S.の生家を訪ねるバスツアーが，会議前日及び最終日に開催された．訪問地は，チェコの南東部に位置するモラヴィア地方にあり，チェコの第2の都市であるブルノからも50 km以上離れた場所にあるため，個人旅行ではなかなか行けない場所であった．学会会場を早朝に出発し，深夜に戻ってくるというスケジュールにもかかわらず，参加者は世界各地から両日ともに20人を超えた．日本からの参加者も多く，西園昌久先生（心理社会的精神医学研究所），秋山剛先生（NTT東日本関東病院精神神経科）をはじめ，福岡大学・九州大学から筆者ら若手精神科医も参加した．Freudが3歳まで過ごした生家は，現在では内装もきれいになっており，ビデオ上映の部屋やFreudに関するいくつかの展示があるため当時の面影はない．しかし建物の作りはそのままで2階の一家が住んだ部屋は10畳にも満たない部屋であり，粗末という方がぴったりくる作りであった．後に精神分析を創始した人物の，原光景ともいうべき経験がここから始まったのだと考えると感慨深かった．他では得られない貴重な経験ができたのも国際学会の醍醐味と思われた．

学会初日の9月20日夕刻より開会式が行われ，地元の少年少女合唱団による美しいハーモニーや，国内の人気バンドの迫力のある演奏が参加者を魅了した．引き続く歓迎会では，各国の参加者同士が集い，挨拶からさらには研究・臨床の話へと新しい交流が生まれる場が提供された．

ポスター発表に参加して

会期中には，各国の著名な専門家による基調講演，特別講演，シンポジウムが数多く開催されたが，それらの中で，世界共通にあるいは各国が独自に抱えている精神医学・精神医療上の問題点・課題が議論された．特に本会議では，ICD-10，

著者所属：1）国立病院機構関門医療センター精神科，2）京都府立医科大学大学院医学研究科精神機能病態学，3）福岡大学医学部精神医学教室，4）東京武蔵野病院，5）北海道大学大学院医学研究科予防医学講座公衆衛生学分野，6）九州大学大学院医学研究院精神病態医学分野，7）NPO法人日本若手精神科医の会

受理日：2009年4月4日

DSM-Ⅳといった統一的な診断基準の再検討，自殺予防対策，アンチスティグマが重要課題として取り上げられていた．

一般演題も盛況で，9 月 21 日～24 日にかけて，ポスター・プレゼンテーションが開催され，連日 300 を越えるポスターが発表された．学会に定められたディスカッションの時間は午後 0 時半からの 2 時間であったが，ポスター会場からのプラハの町並みがあまりに美しかったせいか，午前中から数多くの参加者がみうけられ，JYPO のメンバーも世界の精神科医らと，活発な議論を交わしていた．

ポスターの内容としては，精神保健や社会精神医学といったソーシャルなテーマから，治療に特化した臨床研究，分子生物学などの生物学的研究まで本当に幅広く，この学会の懐の深さを感じた．筆者らもポスター発表を行い，中でも中前は強迫性障害（OCD）の脳画像研究について発表したところ，同日にブラジルの多施設共同の OCD リサーチグループから多くの演題が出されており，彼らとお互いの研究について意見交換をすることもできた．日本からは最も遠い国の精神科医や研究者と出会うことができたのも，こういった国際学会の醍醐味だと思った．

Charles 大学見学と若手精神科医のシンポジウム，交流会に参加して

学会 2 日目の午後，Charles 大学第一医学部（1st faculty of medicine）精神科の訪問見学に参加した．Charles 大学はチェコ最古の大学で，Pick 病を報告した Arnold Pick，AB 型発見者の Jan Janský などが教鞭を執った場所でもある．同大学第一医学部はプラハの街中に立地し，多くの建物はレンガ造りで街並みと調和していた．その中で，精神科病棟は約 200 年前に造られた歴史ある建物内にあり，他科の病棟とは別棟に配置されていた．今回は閉鎖病棟内を見学したが，白い壁を基調として清潔感のある病室が続いていた．見学後，同大学の精神科医師を中心に参加者と質疑応答が行われた．活発な討論が交わされる中，入院時の処遇や退院後の支援など，日常臨床での課題は各国共通しているという印象を抱いた．

病棟見学後，大学敷地内で若手精神科医による卒後臨床研修のシンポジウムが行われた．このセッションでは，英国，トルコ，日本，チェコ各国からの発表者が，研修制度の歴史，研修義務期間の違いや制度における問題点，研修医の現状などを報告した．研修期間は英国，日本，トルコで 2 年間義務化されており，チェコでは医学部卒業後，5 年間の精神科研修期間が設けられている．各国とも近年，研修制度が大きく変化しつつある．お互いの制度の相違点を知り，良い刺激を受けつつ切磋琢磨できれば，精神医学を学ぶ上で視野も広がるように感じた．

シンポジウム後は，本学会に参加した若手精神科医を中心に交流会が行われた．世界各国の参加者との出会いは，国際学会ならではの貴重な経験であった．隣国同士の定期的な合同学会についての話題から，日本近隣の国々とのさらなる交流の必要性を感じた．また，同世代の仲間たちと国内やアジアの精神科医ネットワークを広げていきたいと話し合い，国内外から同じ思いが発信されていることを知った．国境を越えて形成されたネットワークを通じて，今後の精神医学に私達も貢献していきたい．

「精神科におけるリーダーシップと専門家としてのスキル」に関するシンポジウム～JYPO と CADP

23 日には，ジュネーブ大学の Norman Sartorius 教授とロンドン大学の David Goldberg 名誉教授が，「精神科におけるリーダーシップと専門家としてのスキルを身につける」と題したシンポジウムを企画した．話題の中心となったのは両教授が世界各国で 30 回以上開催してきた若手精神科医向けの研修（Course for the Academic Development of Psychiatrists：以下 CADP）であった．日本の CADP は，多くの方々のご協力の下 JYPO が毎年開催しているが，日本で過去最も多く開催されていることもあり，具体例として

JYPOに口演の依頼があった．

シンポジウムでは，まずSartorius教授が研修活動の全容を国際的な視点から紹介し，次にGoldberg名誉教授が口頭発表の仕方，履歴書の書き方など，研修のカリキュラムについて具体的に紹介した．

次に馬場が，日本での第1回CADPがJYPO設立に繋がった歴史や，CADPの準備・運営のコツ，そして，CADPを毎年開催することで，JYPOから生まれた様々な活動の成果を紹介した．最後に，ドイツのDr. Calliessがヨーロッパ内での精神科専門医トレーニングの多様性などについて話した．

今回，私達の恩師である両教授と共にJYPOに関する発表を行うことは大変な光栄かつ重責であったが，発表後のディスカッションではJYPOの活動を自国に紹介し，広めたいという声が多く聞かれた．

おわりに

今回のプラハ大会では，新しいICD-11・DSM-Vといった統一的な診断基準作成に向けた取り組みを含む充実した多種多様なプログラムが10を超える会場で平行して進行され，全てを網羅して伝えることができず心残りであるが，会場内外至るところで，様々な社会的・文化的な背景を持つ参加者同士が熱心に議論を交わしていたのが印象的であった．2008年は，「プラハの春」からちょうど40年を迎える記念の年で，街の中心部にあるプラハ国立博物館前には記念の戦車が置かれていた．本会議は，現代の圧倒的な脳科学の進歩や，人種・歴史・文化を鑑みる必要のない診断基準の国際化・統合などによって私達専門家が忘れ去りそうな，しかし，精神活動を行う人間であるからには不可欠な多種多様な心に向き合わせてくれたようである．次大会は2011年9月，南米アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで開催される．

謝　辞

本会議への参加の機会を与えて下さいました学会関係者をはじめ私達の所属機関の方々，日本若手精神科医の会（JYPO）を支えて下さいました方々に，この場を借りて深謝致します．